

真夜中三重丸

催眠アプリ

~生徒会長の仕事は性処理業務~

プロローグ 屈辱の日々

1章 まさかの本物催眠アプリ

2章 生徒会長適性検査

3章 学園の規則くイカセ合い対決く

4章 セクハラが当たり前になった日常

5章 羞恥全校集会

6章 ドスケベなメス生徒会長になるための特訓

7章 休日は癒しのデリヘル生徒会長

8章 堕ちた生徒会長

エピローグ

プロローグ 屈辱の日々

「そこのお前服装が乱れているぞ」

いやらしい目つきで梶井大介（かじいだいすけ）は女子生徒を見つめる。

「すいません……先生」

注意された女子生徒は怯えた表情を浮かべている。

この聖愛女学園で20年以上も教師を務め生徒指導の立場にある梶井の趣味は女子生徒にセクハラをすることである。

小学校からエスカレーター式に進学できる名門校である聖愛女学園の生徒は世間知らずな箱入り娘が多い。

さらに父親以外の男性とほとんど接したことがない生徒たちばかりだ。

体格が良く強面の顔と、それに似合う厳つい声をした梶井はそんな無垢な少女たちにとっては恐怖の対象でしかなかった。

梶井は自らの欲望のためそれを最大限に生かし利用してきた。

「リボンがちょっと曲がつてるじゃないか……」

そうやって梶井は女子生徒の胸元に手を伸ばす。

そしてそのまま制服のリボンを整えるフリをして胸に触れる。

「んっ……」

女子生徒は目をつむり体をこわばらせる。

しかし抵抗はできない。

恐怖の感情が支配しているからだ。

梶井もそれを理解しており20年以上もの間このような行為を繰り返してきた。

梶井にとってこの学園は天国だった。

教師という立場を利用して好きなだけ女子生徒にセクハラができるのだ。

この学校で自分の欲求を満たすために全力を尽くしていた。

「よし、これでいいだろう」

満足したように言いながら手を離す。

女子生徒は自分の体に触れていた手がなくなったことにほっとしている様子だ。

だがすぐに再び触られることになる。

「スカートも短いんじゃないかあ？」

そう言うと今度は腰に腕を回して抱き寄せる。

そしてそのまま尻を撫でまわす。

「ううつ……」

「なんだ？ 何か文句でもあるのか？」

女子生徒が声を上げた瞬間に鋭い視線を向ける。

「いいえ……ありません」

女子生徒は涙ぐみながらもそう答えるしかなかった。

彼女のスカートは決して短くなく校則にも違反していない、むしろ少し長いぐらいだ。

しかし、梶井が短いと指摘すれば女子生徒は従うしか無い。

反抗しようものなら何をされるかわからない……そういう恐怖心に支配されてしまっているのだ。

「これだけ乱れた服装をしているということは下着も校則違反のものなんじゃないのかあ？」

「そっそれは違います！」

女子生徒は必死になって否定する。

梶井にとって女子生徒の下着が校則違反かどうかはどうでも良く、ただ単に下着が見ただけである。

「本当かあ？ならスカート捲って確認させてくれるよな？」

「は、はい……わかりました」

震える手でスカートの端を掴む。

そしてゆっくりと持ち上げていく。

下着が見えそうになる寸前で手が止まる。

「まだ見えねえぞお」

梶井の声には怒気が含まれていた。

「ひっ！すいません……」

怯えた声で謝罪の言葉を口にするるとスカートを上げる速度が上がる。

スカートが完全に捲り上がりショーツが露わになる。

白しシンプルな可愛らしいデザインのものだった。

「見た目は問題ないようだなあ……」

梶井はそうつぶやくと次に太ももへと手を伸ばし、スベスベとした肌触りを楽しむかのように撫で回す。

「あっあの……もう許してください」

「まだパンティの質感を確認していないからダメだなあ……」
そう言ってさらに強く太ももを握る。

「ひいっ……」

女子生徒の口から悲鳴のような小さな声が漏れる。

梶井はそんなことは気にせず手をさらに上へ動かす。

そして女子生徒のショーツへ手を触れようというその時――

「梶井先生、何をなさっているのですか？」

凜とした少女の声が響いた。

「ちっ」

振り返るとそこには一人の美少女がいた。

整った顔立ちに艶やかな黒髪のパニーテール。

モデルのようにすらっとした体型だが胸は大きくブラウスを押し上げている。

そしてその美貌には強い意志を感じさせるような雰囲気があった。

彼女の名前は朝比奈涼音（あさひなすずね）

この聖愛女学園の生徒会長であり梶井にとって一番の天敵である。



朝比奈は冷たい目つきで梶井を見つめる。

「何って、見ての通りだ。生徒の服装が乱れていたなので直してやっていたんだよ」

梶井は悪びれることなく堂々と嘘をつく。

「そんなわけないでしょう。嫌がる女性にセクハラをしておいて何を言っているんですか？」

「セクハラだと？俺はただ服の乱れを注意してただけだ」

「いいえ、あなたがしている行為はセクハラです。彼女は涙を流しています。これ以上彼女を傷つけるようなことをするなら私も黙ってはいませんよ」

その威圧感に気圧され思わず後ずさる。

「わかったよ。確かに少しやり過ぎたかもしれない。今後は気をつけることにする」

「さすがにこれが最後通告です。今度また同じようなことがあれば容赦はしません」

「ああ、肝に銘じておくよ」

そう言うと梶井はその場を去る。

「大丈夫だった？何かされたのなら私がまた守ってあげるから安心なさい」
「あ……ありがとうございますう」

女子生徒は安堵した表情を浮かべ泣き出す。
それを優しく抱きしめ慰める。

「もう授業が始まるわ。教室に戻りましょう」

「はい……」

女子生徒を落ち着かせると、二人は一緒に歩き始める。

梶井はその様子を遠くから見ていた。

（くそっ……なんなんだあいつは……いつも俺のことを邪魔をしやがって……）
内心で毒づく。

しかし、どうすることもできないため大人しく職員室に戻るしかなかった。

家に帰り一人寂しく酒を飲む梶井。

「朝比奈の奴、調子に乗りやがって」

朝比奈が入学してからというものの梶井は教師としての立場を脅かされつつあった。

「くそっ、あの生意気なデカパイを揉んでやりたいぜ」

朝比奈は梶井にとって天敵だが見た目はかなり好みであった。

いや、かなり好みどころか今まで見た女の中で頭一つ抜けて美しかった。

それは梶井だけでなく朝比奈を見た男たちは皆そう思っているだろう。

顔だけでなくスタイルも抜群で特に胸の大きさと尻の肉付きの良さには誰もが注目している。

それでいて男を知らない無垢な身体だ。

今も梶井の頭の中は朝比奈の体でいっぱいになっていた。

「はあ……やりてえ……」

そんなことを考えているとスマホにメッセージが届く。

「誰からだ？」

画面を確認するとそこには怪しげな文字が書かれていた。

『あなたの願いを叶えます』

「なんだこれ？」

不審に思い削除しようとするも何故か消すことができない。

「ウイルスか？」

そう思った瞬間にダウンロードが開始されてしまう。

「どうなってんだ？」

慌ててキャンセルボタンを押そうとするがやはり反応しない。

ダウンロードは止まらず、ついにインストールが完了してしまった。

「一体どうなってんだよ」

困惑していると画面上に【催眠アプリ】と表示される。

「なんだこれは？」

明らかに怪しいアプリであったが酒に酔った状態の梶井は興味本位だけで起動してしまふ。

すると画面に説明文が表示される。

使用方法について

1. まずは対象者の名前を入力してください
2. 次に認識改変したいことを入力して下さい
3. 最後に実行ボタンをタップすれば完了です

4. 後は自動で設定した内容が反映されます
以上素敵な催眠ライフをお楽しみください。

「ばかばかしい。こんなの信じるわけないだろう」
そう言いながらも指は自然と動いていた。

「朝比奈涼音……」

名前を呟きながら画面をタップする。

「認識改変したいこと……えっと……これでいいだろ……」
酔いのせいで思考力が鈍っており深く考えずに設定していく。

「これでよし……」

そして実行ボタンを押す。

すると画面が一瞬光り、すぐに収まった。

「はあ、何やってんだか……」

溜息を吐いてベッドに横になる。

酒に酔っていたこともあり、すぐに眠りについた。

1章 まさかの本物催眠アプリ

翌日、いつものように出勤する梶井。

まだ早い時間のため学校には朝練で登校する生徒ぐらいいしくない。

靴を履き替え職員室に向かう途中、朝比奈が廊下の向こうから歩いてくるのが見える。

歩くだけで胸が揺れているため、自然に視線はそこに釘付けになる。

「おはようございます」

朝比奈は梶井の姿を見つけると冷たく挨拶をする。

「おっおう、おはよう」

梶井は視線を逸らしながら答える。

「生徒の服装の乱れがどうこう言っておられましたがご自分こそネクタイが曲がっていますよ」

「なっ!？」

急いで首元を見ると確かに曲がっていた。

「まったく、生徒の手本となるべき立場の人間がだらしのない格好をしているなんて恥ずかしいですね」

「すつすまん……」

「あなたのようにだらしのない人が生徒に何か指導できるとは思えませんけどね」

「ぐっ……」

「それにいつも私をイヤらしい目つきで見てくるのも不快です」

「それは……」

「あなたが私の胸ばかり見ていること、バレていないと思ったのですか？本当に気持ち悪い」

「……」

（こんなエロ乳してたら見るに決まってるだろ！ブラウスの上からでもまるわかりの巨乳だし、スカートの下から覗いた太ももの肉付きも最高なんだよ。こいつ分かってんのか！自分がどんだけいやらしい身体をしているかを。そんな身体を見せつけられたら嫌でも視線がいつちまうんだから仕方がないだろ！！）

「なんとか言ったらどうなんですか？」

「それは……」

「はあ、やっぱり反論できないんですね。自覚があるなら改めてください」

「すまない……」

「全く、毎日のように注意されてるのに反省の色が見えませんか」

「……」

「はあ……もういいです。早く職員室に行かれて……」

（ん？どうしたんだ？朝比奈の顔色が変わったような？）

朝比奈はある一点を見つめている。

視線の先を見ると勃起した股間があった。

「な、なにを興奮しているのですか！！」

「え？い、いや、これはだな……」

「あなたという人は、本当に最低ですね。生徒に欲情して下半身を大きくする

なんて、信じられません」

「違うんだ。これは……」

「なにが違うんですか。この変態教師！！」

軽蔑するような視線を向けられる。

「はあ……」

呆れたようにため息をついた後、冷たい声で告げられる。

「この場にいと他の生徒に見られてしまいますね。場所を移しましょうか」
梶井は手を引かれ、どこかへ連れて行かれる。

連れて来られたのは人気の無い空き教室だった。

空き教室に入ると朝比奈は後ろ手に扉の鍵を閉め、梶井と向かい合う。
その表情は怒りで満ちていた。

「はあ、早く終わらせたいのでさっさと出してください」

「何を言っているんだ？」

朝比奈の言葉の意味が分らず聞き返す。

「何をつて、決まってるでしょう。それですよ」

朝比奈は下品なものを見るような目で梶井の股間を指差す。

「早くズボンとパンツを脱いでペニスを出せと言ってるんです」

「いや、ちょっと待ってくれ。どうしてそうなる」

「そんなの、あなたがペニスを大きくさせてるからに決まってるでしょう。あなたが勃起したら性処理を行うのが生徒会長としての責務です」

「なっ!？」

「何を驚いているんですか？当然でしょう。私はあなたみたいならしない男性は嫌いですが、仕事はきっちりこなします」

（嘘だろ……）

昨日酔って【催眠アプリ】にお試しで入力したことを思い出す。

（たしか、俺が勃起したら性処理を行うのが生徒会長の仕事であると入力したはずだ……まさか!）

「さっきから何ぼーっとしてるんですか!さっさとしてください」

「あっああ」

慌ててベルトを外し、ズボンとパンツを下ろす。

ぶるんと勢いよく飛び出してきたモノを見て、朝比奈は顔をしかめる。

「こんなに大きくさせて……本当に最低ですね」

朝比奈の手が梶井の屹立したモノに伸びてきて優しく包み込む。

「うお……」

ひんやりとした手が触れる感触に思わず声が漏れる。

「気持ち悪い声出さないでもらえますか？不快です」

「わっ悪かった……」

謝罪しつつも、あの生意気な生徒会長の柔らかい手に包まれているというだけで射精してしまいそうになる。

「はあ、とりあえず射精するまで手で扱きますからさっさと出してもらえますか？」

「あ、ああ」

しゅっ……しゅっ……しゅっ……

朝比奈は事務的に上下に手を動かす。

その動きは決して上手いとは言い難く、むしろ下手であった。

しかし、普段の朝比奈からは想像もつかない姿に肉棒は喜びに打ち震える。

朝比奈がドッキリでこんなことをするはずがないし、催眠アプリが本物なのだと確信する。

「くう……」

「はあ……ほんと……気持ち悪い……」

嫌悪感を隠そうともせずつぶやく。

「くそっ……もう少しゅっくり……」

「黙っていてください」

冷たく言い放つと、さらに激しく手を動かし始める。

しゅっ……しゅっ……しゅっ……

「ぐお、そ、そこはダメだ！」

「うっ……気持ち悪い……ヌルヌルして……臭いし最悪……」

「くっ……すまない……」

先っぽからは我慢汁がダラダラと垂れており、白く細い指を汚していた。それが潤滑油となり、より激しい刺激が生み出されていく。

「ビクビク震えて気持ち悪い……」

「そ、そんなこと言わないでくれ……」

「さっきよりも大きくして……さらに固く……出そうなんですよね？さっさと出してしまってください」

梶井のモノは今まで生きてきた中で最高の硬度と大きさになっていた。

出来るだけ長く味わいたかったがそうはいかない。限界は近い。

「うっ……もう……出るぞ……」

「はい、どうぞ」

しゅっ……しゅっ……しゅっ……

「ぐあ……でっ……でる！！」

どぴゅっ！！びゅーっ！

勢いよく飛び出した白濁液は手だけで収まらず穢れを知らない少女の顔を染め上げてしまう。

今までの人生で味わったことのない快感に、梶井は放心状態になっていた。

「な、なにするんですか！？」

「はあはあ……すまなかった」

「こんなのが顔にかけられて……」

朝比奈はハンカチで自分の顔を拭きながら、蔑むような目で梶井を睨みつける。

「こんなに汚されたら洗わないといけませんね……くさいし……ベトベトして気持ち悪い……」

「すつすまん……」

「こんなにたくさん出すなんて……どれだけ溜まっていたんですか……」

「それは……」

「まあいいです。性処理は終わりました。これで満足したでしょうから2度と生徒に欲情して大きくさせるなんてことしないでください」

「わかった……」

朝比奈は顔に残っている精液を拭き取ると、梶井を置いて空き教室から出て行く。残された梶井は呆然と立ち尽くしていたが、しばらくして我に帰るとスマホを起動する。

「まさか、本物だったとは……」

2章 生徒会長適性検査

コンコン

「失礼します」

放課後、校内に残る生徒が少なくなったところ、生徒指導室に朝比奈がやってくる。扉を開き入って来たその少女の顔はいつも通り冷たく、美しい。だが、今日はその表情の中に僅かな緊張の色が見える。

「朝比奈、待ってたぞ」

「はあ、あなたのような人とは少しでも関わりたくないのですが、これも生徒会長としての職務ですから」

「相変わらずつれないな」

「別にあなたに好かれたくありませんから」
姿勢を崩すことなく、淡々と答える。

「はは、嫌われてるな」

「当然です。セクハラばかりしてくる教師を好きになる人なんていないと思います。すが？さっさと終わらせたいので始めましょう」

「そうだな。楽しみで仕方ないなあ。何をするのかな？」

「いい加減にしてください。怒りますよ？」

「おっと、怖いな。ちゃんと今から何をするか確認しないといけないと思ってな。確認は大事だろ？」

「くっ、本当にあなたという人は……下着検査です……今から私の下着が校則違反していないかあなたに検査してもらいます」

「生徒会長は生徒指導の教師に下着が校則違反していないか厳しく検査される。これが聖愛学園の決まりだもんな」

「ええそうね。だから早くしてもらえるかしら？」

もちろん下着検査が決まりだなんてことがあるはずもない。

催眠アプリでの認識改変した結果だ。

大嫌いな教師に下着を見られることは屈辱だろうが、それでも真面目な性格をしている朝比奈はルールを破ることはできない。

それが分かっている梶井はニヤついた笑みを浮かべ、最初の指示を出す。

「なら、まずはブラジャーから確認させてもらおうかな。ブラウスのボタンを外してしっかり前を広げるんだぞ」

「もちろんです。しっかりと確認してもらわないと困るので」

朝比奈はブラウスのボタンに手をかけ、上から順番に1つずつ丁寧に外していく。梶井はその様子を舐め回すようにじつくりと見つめている。

全てのボタンを外しちらっと梶井の顔を見ると諦めたようにため息をつく。

そして意を決したようにブラウスを左右に開き、胸元を露にする。

美しく大きな乳房を包む白いレースの付いた可愛らしいデザインのブラが姿を現す。

「しっかりと確認しないとなあ。どれどれ……」

胸を検査するという名目でしっかりと凝視しながら、わざとらしく鼻息を荒げつつ、ゆつくりと近づいていく。

「んん……」

朝比奈は恥ずかしそうに身体を震わせ顔を背ける。

「どうした？何か問題でもあったのか？」

「いえ、なんでもありません。続けてください……」

（顔が赤くなってるぞ。気丈に振る舞ってはいるが恥ずかしさは残っているみたいだな）

そんな朝比奈の様子を堪能しながら言葉を続ける。

「生徒会長らしく校則を意識した白のブラジャーか。それにレース付きで上品なデザインだな。素晴らしい」

「当然のことです。私は生徒会長ですから」

「確かにその通りだ。生徒会長は真面目で模範的な生徒でなければいけないからな。じゃあ次はスカートの中を見せてもらおうか」

「ええ、分かりました」

朝比奈はゆっくりとした動作でスカートのホックを外し、ファスナーを下げる。

そのままスリと脱ぎ去り、床に落とす。

朝比奈は下着だけを身に着けている状態になる。

スラッと伸びた脚、形の整った綺麗なお尻、細いウエスト、大きい胸、柔らかそうな太ももの肉付き、全てが完璧であった。

「しっかりとブラとおそろいの模範的なパンティだ」

「当たり前です。校則に違反しているような下着を身に着けることは許されませんから」

「その通りだ。さすがは生徒会長といったところか」

学生らしい清楚さを保ちながら、しかし女性としての魅力を最大限に引き出せるような絶妙のバランスの下着姿である。

「それで、問題はありませんでしたよね？」

「ああ、特に問題はない。いつも通りの完璧な生徒会長だったよ」

「そうですか。それを聞いて安心しました」

ただ下着姿を見るだけで満足するような男ではない。

まだ催眠アプリを利用したセクハラ検査は残っているのだ。

「次の検査も重要だからな。朝比奈も分かってるよな？」

「ええ。分かっているつもりです」

「よし！なら次は何の検査を受けるか言ってみろ」

「私、朝比奈涼音の胸の発育検査です」

「そうだな。どうして胸の発育検査を受ける必要があるか分かるか？」

「もちろんです」

「よし、説明してみろ」

「はい。セックス適齢期である私たち聖愛学園の生徒がきちんと胸で男性を喜ばせることが出来るかを調べるためです。そのため男性の目線で厳しくチェックする必要があります」

「うむ、そのとおりだ」

梶井が設定した通りのセリフが返ってくる。

これから自ら胸を差し出す朝比奈の姿を想像するだけで鼓動が速くなるのを感じる。

「それじゃあ検査を始める。ブラを脱いで胸を見せるんだぞ」

「はい」

朝比奈は返事をするが動こうとはしなかった。

（おいおい。まさかここまできて怖気づいたんじゃないだろうな？）

「どうした？さっさと始めてもらわないと困るんだが？」

「わ、分かってます……」

朝比奈は覚悟を決めたように目を瞑り、震える手で背中に手を回しホックを外す。そしてストラップに手をかけて、カップを下にずらした。